スペイン革命におけるCNT (15)

ホセ・ペイラッツ
今村五月訳

サン・マテオ（カステリョン）――住民五千三百。農業。オリーブ油、小麦、とうもろこし、野菜少々。製油所、製粉所、織物工場、モザイクと人造宝石の工場。

運動の初めに、左翼のすべての政党と組織からなる革命委員会が反動分子の財産と土地の接収を行なった。続いて全住民の総会で将来の集産体の方針を決める委員が任命された。この委員会の中でCNTとUGTは意見を異にし、その結果、両組合本部に一つずつ、二つの集産体をつくることになった。連合の集産体は二五家族を擁していた。技術的に最も有能な同志の間から種々のグループや部門ごとに労働代表が任命された。これらの代表は管理委員会に参加していた。労働時間は定められなかった。

最初、財政が窮乏していたので、全集産体員に一共同食堂が建てられた。後に次のような家族給が設けられた。即ち、家族一人当り一日三ペセタ、妻二ペセタ、独身者三ペセタ、一六歳以下一・五ペセタ。それ以来、家族の買物は共同組合で家族給と同額の配給券に基づいて行なわれた。入手の困難なものは各家族の必要を考慮して配給された。集産体の生産物は自由に入手できた。労働の義務は老人と子供だけに免除された。家族のない独身者は集産体に加わって、衣類の洗濯や調理の仕事に従事する婦人の同志の世話を受けた。加入には規約に従うことと財産を共有にすること以外は要求されなかった。共同生活一年後には出たい者には自動的に自由が与えられた。この種の事は一件しか起きなかった。

総会だけが不道徳の廉で被害者の立合いの下に除名の処置をとる権限をもっていた。しかし、そんな処置に訴えるような事件は全くなかった。病気や医者の治療を受ける場合には集産体が費用を出した。子供たちは集産体員の要求を十分満足させうる一人の有能な教師に任かされた公立の学校に通っていた。

バルセロナ、タラサ、その他アラゴンのいくつかの村と交換が行なわれた。レバンテ地方農民連合はセメントや肥料を供給した。交換は七月一九日以前の価格に基づいて行なわれた。

リョンバイ（バレンシア）――住民三千。農業。みかん、高地ぶどう、ぶどう酒、野菜類、穀類、オリーブ油、えんどう。製粉工場、製油所、石けん工場、酒造工場。農業集産体は一九三六年八月に設立。CNTだけが集産化に参加した。約一三五家族、総計六五〇人が構成した。労働は四つのグループに組織され、各グループに一人の代表がいた。一四歳以上の全員が基準労働時間七時間で日給五ペセタだった。食料品は各々の家族数に従って購買部で分配された。品物の価格は運営委員会によって決められた。婦人、老人、子供は配給制の食料に関しては優先権があった。加入には、善良な反ファシストであり、しっかりした人間で、個人的な物以外はすべての財産を供出するということ以外の条件は要求されなかった。自発的な脱退の場合には、加入した時からの価格の変動を常に考慮して、財産をその当事者に返した。除名を勧告されるような不道徳な事は全然起きなかった。医療衛生の世話は集産体の費用で行なわれた。二人の有能な同志が管理する近代教育の材料を備えた学校が建てられた。

経済の面では、通貨によって生産物を評価して交換することが行なわれた。集産体は地域的地方的に連合していた。

アデムス（バレンシア）――住民五千。農業。三百ないし四百ヘクタールの土地はツリア川から水を引いていた。約千ヘクタールは乾地だった。生産物は穀類、ぶどう、砂糖大根、りんご、豆類。

一九三六年九月、それまで一致して働き闘ってきたCNTとUGTが集産体を設立した。そこには五百家族、CNTの三百家族とUGTの二百家族が加入した。労働は耕作地の分割に従って一〇人あるいはそれ以上からなるチームによって組織された。チームの代表たちは毎晩集って翌日のための労働を組織した。土曜日ごとに労働者総会が開かれて、すべての労働者が将来の方針に関して自由に討論した。生産物は共同組合の倉庫に貯蔵された。

配給制の生産物を手に入れるために、家族を構成する人数を明記した家族手帖が利用された。履物と衣類とは配給券によって供給された。集産体内部でも地域生活のためにも貨幣は存在しなかった。けれども、特別な事情で首都に転出しなければならなくなった者に対しては貨幣が与えられた。集産体員はすべて、男女とも一四歳以上六〇歳以下、健康な者に限り、体力と能力に従って働く義務をもっていた。家事に従事する既婚の婦人はこの規定から除かれていた。

加入を望む者は所有している物をすべて明確に届出なければならなかった。が、それを供出するか消費するか使用するかは自由だった。自発的脱退の場合には、目録に従って、持ち込んだ財産は返却されるか、あるいは貨幣でその額が支払われた。信用のおけぬ不道徳なことで除名されるようなことは一件もなかった。

教育と医療衛生の事業はいつであれ集産体によって保証されていた。

生産物の交換と売買はその時々の要求に従って無差別に行なわれた。集産体は住民の経済生活に改善をもたらした。あらゆる種類の作業所（製鋼、製靴、縫製、仕立て等）をつくった。それらは以前はなかったのだった。

ウティエル（バレンシア）――種々の活動を含む農業集産体で、酒造と製油の工場があった。この事業に熱意を傾けた連合の組織は二千七百人の加盟者からなっていた。集産体は六百家族からなっていた。この集産体は純粋な自由共産主義の原則に鼓吹されていて、その実践によって、自由共産主義体制の頑固な敵の多くを味方にし

た。ウティエル共同体は、ファシストの攻勢の日々、前線とくにマドリッドに素晴しい補給活動を行なった。一度は一四九〇リットルのオリーブ油を、その他は同じく四七五〇ポンドを送った。隠元豆、小麦、米、その他、前線に向けられた量は数千キロに上り、馬鈴薯七五〇〇ポンドが一度に供給された。これらの贈与は無償で行なわれた。

集産体はあらゆる補助を失った五〇家族以上に衣料や食料や宿泊所等を世話した。すべてそれらはどんな種類の公的援助も受けなかった。

スエカ（バレンシア）――この海岸地方の村は、国内消費にも輸出にも非常に重要な二つの農産物、即ち米とみかんが特産だった。ここでは集産化はCNTとUGTに加入している農民の圧力の下に非常な成果を獲得した。

「米作地帯の心臓部。ペニャフィエル候爵の所有地。三、六六五ファネガダ〔一ファネガダ―約六四アール〕の水田と三二〇ファネガダの畑と一一五ファネガダのみかん畑の接収によって、二二五家族以上からなる集産体をつくった。集産体はそれまでの貯えもなく彼らの要求に応えなければならなかった。湿地では八五〇、五五九キロの米を収穫。集産体の購買部には一四万ペセタ相当の商品があった。みかん約三、三〇〇アロバ〔一アロバ―約二五ポンド〕。

全集産体員は必要を満たされ、その上医者も薬もあった。大量の牧牛、実に模範的な豚の飼育場。盛んな養鶏。製鉄所、自動車修理所、農機具部門、乾草をひくためのグラインダー、脱穀機、トラクター。沢山の馬のいる手入れのゆき届いた畜舎。」（ホセ・プロス、バルセロナの『ソリダリダッド・オブレラ』一九三六年一〇月のみかん共同組合の設立で、次の規則の下に行なわれた。

「みかん増収のために〝スエカ人民みかん共同組合〟を設立する。これには、最高の収益、あらゆる努力の結集、栽培法の合理化、仲介業の排除、利益の最も正当で人間的で従って現状の社会の方向に最も調和的な分配を達成するために、この富の生産に各自の努力をもって従事する労働者たちと、自分の農園の耕作に直接従事する小地主たちとを包含する。共同組合の最終目標は次のようになるであろう。

農業について――a　共同地の直接耕作を通し、また私有地の統制と監視を通して、耕地の合理的科学的耕作を確保すること。b　諸外国の経験を活用し、あらゆる国の技術者と直接連絡を保って、最も適当で秀れた変種の植えつけに努力すること。c　最も完成された処置によって、農業生産の災害に対する闘いを開始し実行すること。

商業について――a　仲買人を排し、消費市場と直接連絡を保ち、彼らを十分に満足させるためにその需要と要求を詳しく研究して、この地方のみかん生産の販売と輸出を直接行なうこと。b　この地方の独自の基準を設けて、海外市場で最高の品質と信用を獲得するために、きずのある実はすべて取り除くことを義務づける。c　輸出に最も都合のよい方法で実を揃え、分類し、供出すること。

社会について――a　人間による人間の搾取を縮少し、廃絶にまで及び、みかん販売の収益の最も公平な分配を達成すること。

b　この目的のために充てられる一部の収益をもって、プロレタリアの社会的改善のためのあらゆる種類の事業をすぐに行なうこと。c　小地主に彼らの農園の耕作と肥料購入のために前払い金制度を実施すること。

1　すべての農業労働者、加入を希望する近隣地方の住民、みかん栽培のために接収された農園の所有者は当然、組合員としてこの共同組合に加わるであろう。

2　みかん栽培にあてられるこの村の境界内の土地は、すべて当然共同組合に属するものと考えられる。植えつけを行なうべき変種を決定する指導委員会の許可なしに、新種の植えつけを行なうことはできないであろう。

3　みかん栽培にあてられる土地のために次の区別が行なわれる。a　集産体方式で耕作するために旧地主から接収された土地。b　現地主によって耕作される私有地。

4　共同組合の指導委員会は、次のいずれかの場合にあてはまるすべての土地を、みかん栽培にあてるために接収する決定を行なうことができる。a　地主に放棄されて、耕作する人間がこの地方にいないとわかった場合。b　反革命、体制の敵と公然とみなされた人間の所有である場合。c　委員会が予め一般的に規定した最大面積を越える土地を他の地方に所有していることを考慮に入れて、同一地主に貯蓄がある場合。この場合には過剰分のみ接収される。

5　接収された土地は、指導委員会の定める基準に従って、共同組合に加入しているすべての農民によって集産体方式で耕作されるであろう。耕作の指導は指導委員会の責任である。

6　共同耕作地で行なわれた収穫の現金収益は委員会が管理する。委員会はそれであらゆる種類の費用を支払った後、次の方法で配分する。a　予備資金に一〇パーセント、b　プロレタリアの社会的改善に二〇パーセント。c　共同組合に提供した労働に比例して、共同組合の組合員である労働者たちの間で分配するために七〇パーセント。

7　共同耕作地で耕作労働を行なう労働者は、その時々の情況を考慮し、かつその件について然るべき資格のある組織と協議して、指導委員会が決定する日当を受けるであろう。

8　私有地は現在の地主によって彼の自由な工夫と費用で耕作されるだろう。しかしながら、労働者の雇用と労働量と賃金に関しては、指導委員会が出す決定に従う。委員会はその技術陣により耕作活動を調査し、その欠点を指摘し改善することができる。

9　みかん栽培用の個人耕作地の労働は、委員会の定める順番に従って共同組合の組合員労働者によってのみ行なわれるであろう。

10　個人的に耕作された土地で得られた収穫の現金総額は次の方法で配分されるだろう。a　実労働に比例して、耕作と収穫に参加した労働者に収益として分配するために二〇パーセント。b　地主の収益と耕作のあらゆる種類の費用として八〇パーセント。

11　共同組合の統制下に置かれたすべての農園で収穫した生産物の販売利益は、共同体のものも個人のものも、全面的に指導委員会に管理される。指導委員会は実の選定を行ない、仲買人や相場師を排した取引機関を通じて消費者と交渉し、収穫物の配分と輸出を直接行ない、代金を受け取る。代金は予め定められた基準

に従って配分される。

12　共同組合は次の機関によって指導される。a　共同組合の全組合員によって構成される総会。この総会は最高権を有し、委員会提出の会計報告を審議し、翌年度の委員会を選出するために、一年に一回定期大会を開く。また委員会独自の召集か、百人の組合員の要請によって、臨時大会が開かれる。いずれも八日の予告期間をもって召集されなければならず、最初の召集では組合員の三分の一の出席を必要とする。もしこの最低数が集まらなければ、二日後に二回目の召集が行なわれる。この時には出席者数がいくらであれ議決することができる。臨時大会では召集状に明記された問題以外は扱われない。b　指導委員会は各部門別々に通常総会で任命される六名の労働者と三名の雇用主からなる。任期は一年で全員改選される。委員会は都合がいいなら技術職員と補佐を無投票で口頭だけで加えることができる。総会の代表者として、明記されないあらゆる権能をもって活動する。

補足――商業活動のために、この共同組合は相互協定に基づいて、他のみかん地帯の村々と連合することができる。」

レバンテ地方農民会議によって採択された決定

（一九三七年一一月）

農業経済の情況は、諸集産体の組織化、制度化、活動化と、政府によるそれらの規則の承認、厳しい法律の中でできるだけ柔軟な財政による集産体管理を早急に計画することを、要求していた。これらは集産体員たちの不屈の意志が明白にされた時に、彼らの経済状態、集産体の技術的管理に必要な資力の不足、集産体の生産および消費能力を示す統計活動の絶対的必要性、これらすべての問題から、技術的指導、即ち諸集産体の中で生まれながら全国的な調和と協力の形に到達するだろう様々の規則と、各集産体との中央集権主義なき統一に至るまでの助言、これらをいつでも知りうるようにするはずであった。

このため、レバンテ地方農民連盟書記局は補佐および統計の部局を作ることによって解決しようとした。この部局は集産体の制度化と活動化から始め、やがて農業開発計画に至る農業計画をたてるという困難な仕事をかかえていた。しかし、重大な不則の事態がなければ、多分来年度内に、農業開発は誰もが驚くほどのものになるだろう。

同部局の現在の状態は次のとおりである。

集産体――合法的に建設されており、三四〇が活動している。このうち六〇はすでにその会計簿を法律に従って公開しているし、債権と債務を含む決算を行なっている。帳簿を作成し、しかも合法性を与えるために集産体の全経済を再建しようという、困難で貴重なこの事業のために、たった二人の監査人がいるだけである。彼らは村から村へ巡回して各集産体の会計状態を明朗かつ合法的にしている。

経過――労働省の認可を待っている集産体が現在七五ある。その法的承認は同省がバルセロナへ移動したため多少遅れるだろう。そこへ申請書類を毎週提出する必要があるからである。

工業集産体――我々農民の集産体の規則と構造と活動を範として、法的身分の全く不明な相当数の工業が、農業集産体がとっているのと同じ原則で、工業開発を行なうための経済的集産体を結成した。現在一五の工業集産体があり、毎日かなりの割合で増えている。

規則と集産体――各集産体によって異なる規則をつくり出し、各集産体の発展と各種各様の規則とを具体的に知ることを妨げるような混乱を避けるために、勿論労働省が許可しないだろうという危惧とは別に、すべての集産体の模範になるような規則を用意する必要があった。今日すべての確立した集産体と許可申請中の集産体とが有している規則、全く連合の希望どおりではないが（それを否定する理由があるだろうか?）、マルクス主義の教義だけに示唆された現行の社会法に対しては承認の唯一可能な規則を、である。

会計、書記局、統計部――集産体の活動にとって第一に重要なもう一つの問題は会計である。技術的管理的な書記局の仕事や統計に関する仕事と同様に、この仕事をやる能力のある人材が不足しているため、均一の、しかも誰にでも簡単で平易な会計計画を見出さなければならなかった。同じ要求は書記局の仕事からも生まれた。そして社会経済の計画すべての基本である統計に関しても、即時、均一の計画を作成することが要求されていた。〝補佐〟および〝会計〟の部局によってこれは達成されたが、人材不足でつまずいてしまったので、これら二つの部局は〝宣伝〟部とともに技術者養成の短期講習を行なった。執行部と会計部はごく近い将来地区および地域集産体の書記局と会計部にふさわしい多数の同志を我々にもたらすであろう。

収用記録――実際、組合と集産体は、地方の農園や、接収された土地にある農園や、農業以外の産業を収用した記録を多数もっている。しかし、これらの収用物件や記録はあっても、一〇月七日の政令が要求する法的所有ではない。そのため、警察や知事や農地改革協会等に訴える多数の地主たちは土地を取り戻し、我々の組織は農業経済発展のために不可欠の手段を失うままにされている。だが政府の援助を言うのではない。今述べた政令に従って収用された土地はなかった。何物も得られなかったことを見ているからである。統計部はこういう事態の改革に乗り出し、この地方の全ての村々のために、資格をもった担当者で収用記録を作成し、この地方の二百以上の村と地区のほとんど全部の村で土地を〝合法的に〟収用した。

一九三七年七月八日法――農業省のこの法令によって一九三七農業年度にできた集産体と収用が公表された。去る一〇月三一日、本農業年度を終えるに際して、合法的に設立されなかった集産体は解散され、一九三六年一〇月七日政令の規定に従わないで収用して耕作している土地はもとの地主のものになった。この重大問題の解決のために、補佐部は農業経済地方評議会に対して農業大臣がこの政令をもう一年延期する処置をとることが望ましいと提案した。農業経済地方評議会、地区および地域大会、農民地方連合全国大会によって採決された後、この提案は農業大臣に手渡された。彼は延期することを約束した。この件を忘れていないのに、この提案を実行する処置が何らとられていないのは、今日おかしなことである。

集産体地域連盟――経済の実情は、活動したり貸したり借りたり取引きしたり開発したりするための十分資格のある機関を作ることを要求している。これは集産体を合法化すること、集産体を地域、地区、地方連盟、最終的には集産体全国連盟に組織することによってのみ可能である。このためにすでに三つの地域連盟が結成され、他の多くは結成途上にあり、残るものもこの地方連盟に加えるため

の計画が始められている。

報告――毎日五〇内外の経済的法律的意見が処理され、それらは非常に多種多様な問題に関するものであるので、一つ一つ述べていては際限もない報告になるだろう。

将来――集産体に反対してなされるキャンペーンにもかかわらず、集産体はひるまず補佐および統計部の計画する連盟の規定を実践し、努力を倍加し、提出された農業経済再建計画を着実不屈に実現し、統計部に関してはこの部の要請に応えることによってのみ、やがて遠からず世界に我々の集産体が何物であり、レバンテのCNT農民が何者であるかを示すことができるであろう。

カステリャ地方における革命

クェンカ――一九三七年三月半ば、CNTとUGT両組合員は同地方の土地の集産化の問題について次のような原則を発表した。

「革命によって提起された諸問題をめぐって、農民の間にCNTとUGTの二つの組合員が誘発している不断の不一致を考慮して、この地方における両組織の責任者たちは、この問題を検討し解決するために会合し、両組織とも有効で同盟者を獲得しているこの地方の住民の中における共存と労働の発展のために、共同で次の原則を設けることにした。

第一、収用された土地と産業は〝集産体〟で利用される。

第二、各村の生産者の間で結成されるこの集産体は、彼らの属する組合組織がいずれであれ、一執行委員会を任命する。その機能とは、

a　集産体の集会で、また集産体の規則によって出される規範に従って、労働を指導し生産を管理すること

b　他の地方および地域との生産物の交換を行なうこと

c　集産体の各人が集会で多数で決定したことを履行するよう監視すること

である。

第三、この執行委員会は集産体によって集会で選ばれたごく少数の者によって構成され、両組織から同数の者を任命する。後者は最も有能な者であるよう努力するであろう。

第四、集産体に入るためには、二つの組合すなわちCNTとUGTのいずれかの証明書によって証明される労働者という資格で十分である。

第五、もし小地主が集産体に加入したければ、彼の所有する全財産を集産体の処置に委ね、譲渡したものの採否を集産体に任かせなければならない。もしこの前提条件がなければ彼は集産体に入ることはできない。

第六、労働について――執行委員会は、その生産指導部門の活動において、集産体の集会で採決される決定に従い、季節や時期やその他労働量の加減を要する原因に応じて、労働と労働時間を決定する。

第七、労働を不可能にする病気や事故の理由がなければ、誰も労働に参加することを免れることはできない。

第八、労働はそれが必要とする人数のグループによってなされ、労働者の合意で現場の代表が任命される。

第九、すべての代表は、意見を交換し、労働のよりよい発展のための決定をするために、毎日執行委員会と会合する。

第一〇、代表は労働が最も効果的に行なわれると考えられるあらゆる方法を努力し、親近感と道徳感を示し、予備知識を持たない同志のために仕事を教えなければならない。

第一一、代表はどの同志にもいかなる刑罰も課してはならない。不道徳なことを発見したら委員会か集会に報告すればよい。それらが処置を決定するであろう。

第一二、越権行為のあった代表は執行委員会の委員と同じく、即時解任され、集会で検討して解決する。

第一三、消費について――集産主義には賃金は存在しない。それは労働に対する侮辱、不正、不当な償いだからである。従って、生産者は実際に働いた日給に等しい前払い金を受け、この日給に、集産主義の保護を受ける一五歳以下の子供たち一人当たり百分の八十の付加分を受けとることができるだけである。

第一四、地域間の生産物交換は共同組合を通して行なわれる。共同組合は集産体と共同して分配を行なう。

第一五、集産体の建設に際しては、二つの組織のいずれかによって収用された農園や工業が集産体のものとなり、これらの農園はUGTとCNTの両組合の間で一致できない場合にしか分割することができない。万一こういう場合があれば、分割は等分になされる。

第一六、費用や前払い金の残余の収益は次のように配分される。教育に二五パーセント、労働具の購入と改良に二五パーセント、残り五〇パーセントは集会で集産体員たちが同意すれば全集産体員の福祉のためにとっておく。

第一七、労働時間は集産体に加盟している者が病気の場合には考慮される。

全集産体員の義務と権利

第一、集産体に加入する時には、ずっと以前につくられた集産体であっても、集産体員は権利と義務において他の者と同等である。

第二、集産体員は誰であれその体力によってできる労働以上は要求されない。老人と病後の療養者は大切にされ、いかなる場合にも最も軽い労働につかせる。

第三、相互尊重が集産体員の人間関係を揺らぐことなく律していなければならない。なぜなら集産体に相集まったのは全員の福祉のために団結して働くためだったからである。従って、他の者を攻撃しようとする集産体員は、相手が集産体員でなくても、あるいは自分に関係のない利益を横領しようとする者は、第一の方法として罰せられ、再びそういうことをすれば除名されて、得ていたすべての権利を失い、集産体に譲渡したもののいかなる利益も要求できなくなるだろう。もし誤ちが軽いものであれば正当な罰が課せられるだろう。

第四、集産体員の誰も、集産体が必要とし集産体が彼に履行できるとみなす労働に、家族が従事するのを反対することはできない。彼は自分の生産能力に応じて生産に参加するものと考える。

補足――この規定で予測されていないことはすべて集産体の総会で決定することができる。」

アルマグロ（シウダッド・レアル）――カステリャ農民の『カンポ・リブレ（自由な村）』紙（一九三七年一〇月）から次の資料を引用する。

「アルマグロはラ・マンチャの中央にある細長い、人口の多い、砂利を敷きつめた道をもつ、ぶどう酒の美味い村である。百万ポンドまで入る酒倉をもっている。赤土の畑をもっており、そこでは穀物は肥料を要しない。我々の同志がアルマグロにつくった集産体は高度に革命的な特徴を示している。

その起源から今日までに経なければならなかった変遷は、多かれ少なかれ全ての経済組織が通過したものだった。初期の叙情的熱狂、政府の横暴との磨擦、もっともこの場合は当事者の委員会の指導で克服したが、ある者たちの無知との衝突、他の者たちの利己主義の障害、そしてついには目的地に到着した者が獲得する資格証となる様々の事柄。アルマグロ集産体はまだ目的地に到着していない。しかし休みなく直線コースを進んでおり、工夫をめぐらして障害を取り除きながら着実に前進している。

次に示す統計資料は集産体がみずから公開したばかりの記録から抜萃したものである。初期の生産手段はここで使った目録によれば家畜と農機具と生産物である。

らば	六八〇八〇ペセタ
牛	一九七五〇ペセタ
羊	七〇〇〇〇ペセタ
耕作機械	一四〇五〇〇ペセタ
合計	二九八三三〇ペセタ

生産物

大麦	三四〇〇ファネガ（一ファネガ＝約五五・五リットル）
ぶどう酒	五〇〇アロバ（一アロバ＝約二五ポンド）
ライ麦	六〇〇アロバ
えんどう	八〇ファネガ
小麦	一七〇〇ファネガ
とうもろこし	三五ファネガ
すずめのえんどう	一六〇ファネガ
エジプト豆	四ファネガ
からすのえんどう	七〇ファネガ
そら豆	二〇ファネガ

総額一〇〇九五三ペセタは家畜の換算額と合わせて三九九二八三ペセタの基本財産と考えられる。集産体の次年度にはそれは次のような経済力を示している。

現金	四三三五・七四ペセタ
らば評価額	九一一五〇・〇〇ペセタ
牛	二六七〇〇・〇〇ペセタ
羊	七四〇〇〇・〇〇ペセタ
耕作機械	一五〇四〇五・〇〇ペセタ
荷車	四九六九・〇〇ペセタ
大工道具	五一二五・〇〇ペセタ
合計	三五六六八四・七四ペセタ

生産物（在庫）

ぶどう酒	二〇五〇アロバ

オリーブ油	一七〇〇アロバ
大麦	五九五五ファネガ
小麦	九〇〇ファネガ
ライ麦	一三九ファネガ
えんどう	三一〇ファネガ
そら豆	一六〇ファネガ
エジプト豆	二〇ファネガ
すずめのえんどう	三三五ファネガ
紙巻たばこ	七三ファネガ
からすのえんどう	三〇ファネガ

総額一五七二六ペセタは家畜と道具類の額と合計すると五一五四一〇ペセタになる。

従って、一九三六年九月一日集産体設立の日の資産と、今日所有している資産の間の差は一一六一二ペセタである。

一年間（一九三七年）の金庫の動きは同記録によれば次のとおりだった。

入金	三七五五七六、八四ペセタ
出金	三七一二四二、一〇ペセタ
差額	四三三四、七四ペセタ

この大略の中で、多分それを証明するであろう詳細を見なくても、一つの事に気がつくのである。貯蓄である。貯蓄のための貯蓄ではない。それについては言うこともない。そうではなくて地域外の兄弟のための予備なのである。

ここで取り上げている集産体の管理評議会を構成する同志たちは、この隔りを十分認識しており、しかも連盟の規則に完全に一致させるために組織を義務に仕えさせることを望んだ者たちだった。彼らの一人一人について我々は、もし正しいアナキストがお世辞を真に受けるものなら、いい事ばかり言うこともできるだろう。しかし、そういう事は当の委員会の全員にめったにないことであるので――そしてそのために、不正な委員会とけんかした人たちが入ってきた――、この四人の〝指導者〟は煙草も酒ものまないということを了解しておかなければならない。

都市では通りや広場や公園の名が変わって、よりふさわしい名が献じられた。それに平行して、同じようにアルマグロ集産体も、すべての革命家が彼らを導いた英雄やシンボルに捧げる敬意にふさわしい名を、彼らの農園につけた。だから、以前は無意味な名で呼ばれていた別荘は、接収された今日では〝ドゥルティ〟〝アスカソ〟〝FAI〟〝CNT〟〝ウクライナ〟〝ウラル〟〝モントセニイ〟〝イサアク・プエンテ〟〝ヘルミナル〟等と呼ばれた。

各自が自分の必要に従って生産するという美しいアナキズムの理論は、やっと、家族数に比例して貨幣か現物かで行なわれる家族給を達成した。それは皿に計って入れられる兵営の食糧配給のようなものだった。アルマグロの集産体員たちはいかなる種類の契約もなしに、毎日家族が必要とするパンやオリーブ油や馬鈴薯を家族のために手に入れることができた。

三百人（平均）の労働者の家族が一年にこうして消費した量は、オリーブ油七万五千ポンド、馬鈴薯三万キログラム、パン一一万ペセタ相当だった。その上、労働者たちは仕事時間中自由に

ぶどう酒を飲むことができた。それは一七万五千ポンドを消費した。

住民のエネルギーは消費するところの物によって計られる。この報告を未完成で終らせないために、我々は三つの大倉庫、即ち寺院だったところに建てられた大工の仕事場、ドゥルティ荘、モントセニイ荘について語らないわけにいかない。また、まず子供の寮を建てなければならないという計画、UGTや他の政党、特に共和主義同盟との友好関係、〝アカプルク〟方式のオリーブ製油工場、そして最後に共同生活におけるこの組織の重要性について語らねばならない。ここでは我々は一五の共同体のうち六つをもっている。」

ベルヴィス・デル・ハラマ――一九三七年一〇月三〇日号のバルセロナの『CNT－FAI情報』からカステリャのこの村に関する概要を転載しよう。

「ハラマ河岸地帯パラケリョス領内には、灌漑地約五七・三ヘクタールと耕作可能な乾燥地約九六ヘクタールをもつ農園が一つある。それはベルヴィス・デル・ハラマ集産体の所有になっている。

グラナダの領主ドニャ・ピラル・ロドリゲス・トレスとかが、ベルヴィスの灌漑可能な数アールの土地を開拓して畑地にしたいと考えた。そのために遠く離れたアンダルシアから少数の灌漑のための労働者がつれて来られた。そのアンダルシアでは農民たちはCNTの闘士であった。彼らはカスティリャに来てマドリッド公共職業組合に加盟した。一四人か一五人のアナキストがベルヴィスに来た。極めて有能な連中だった。

一九三六年七月の蜂起の日がやってきた。農園にいた七五人の労働者はそれら小数の同志の革命的な活動と洞察力のおかげでその農園を収用した。接収は一九三六年七月下旬に行なわれた。

同志マリアノ・ウリアスとロケ・アンテケラは、二人とも農業労働者連盟（UGT）の組合員だったが、我々の同志に対して、労働者の団結とスペイン革命の問題との明白な洞察を有していたことを指摘して、非常な賛辞を表明した。

農業労働者連盟は共和国到来と同時に結成され、現在約二百人の加盟者を有している。ベルヴィスの我々の同志は一九三六年三月に連合組合に組織されたが、一九三七年三月には約六〇人のパラケリョスの労働者を吸収していた。

集産体は、両組合本部の同志たちによって、彼らに組合的友愛関係を思い出させる兄弟愛のうちに成立していた。彼らは自分の仕事を知り、また階級意識をもっている労働者たちだった。

集産体は接収と同時に以前から耕作していた七五人の労働者をもって活動を開始した。当時一四〇人の集産体員が彼らの家族とともにいた。そのうち二〇人はCNTの、残りはUGTの労働者だった。ここに正確な資料がある。

年収。小麦二七万五千五百リットル。大麦二二万二千リットル。からす麦一万一千百リットル。すずめのえんどう八千三二五リットル。とうもろこし四万四千四百リットル。いんげん豆約五千五百五十リットル。馬鈴薯二五万ポンド。メロン二五万キロ（三〇万ペセタに相当した）。そら豆一万九千キロ。

集産化された家畜類。らば五〇〇頭、うち二〇〇頭の子らばは三万ペセタで買った。役牛二〇頭、うち一〇頭は七千二百五十ペ

セタで買った。乳牛二〇頭、うち九頭は一万一千三百ペセタで買った。豚四〇頭。羊六五〇頭、うち一〇〇頭を七千ペセタで買った。山羊八二頭。雌鶏三五羽。計算すると家畜を買うために五万五千五百五十ペセタを費したことになる。

機械については二台の刈り取り機を持っており、一台は四千六百ペセタかかった。集産体でなしうることに諸君は注目すること。

六〇人の子供が通う合理主義的な学校を建てた。製鉄所、大工の作業場、石工場をもっていた。衛生事業はパラケリョスの医師によって集産体員に提供され、費用は集産体が負担した。普通、集産体員は日給八ペセタを受け取り、さらに畑で生産される物を彼らの必要によって利用した。

我々の組織の同志は評議会の中で兄弟組合の同志と同等の任務に、個人の資格でついている。そしてUGTの同志の極めて大きな美徳は、どこにいても可能性を確かめるために特別な努力を払うことを知っていることだ。最初彼らは農地改革協会に参加していた。しかし、供給の諸問題は農民地方連盟の方がより一層深く考えているということを納得することになった。

ペラレス・デ・タフニャ――ペラレス・デ・タフニャは肥沃な谷に位置している。訪れたことのない者はその主要道路の完全な正常さを理解することができないだろう。それはマドリッド－バレンシア幹線道路と連絡しており、その脇道の絵のような起伏が幹線道路に合流している。ペラレス・デ・タフニャの土地はただ広大な台地（メセタ）の裂け目である。だから、その裂け目の一つは、今言った事とは逆に平らなカステリャの一村なのである。

一九三六年一一月二五日、連合の組織の支部として公共職業組合が設立された。八月一一日にすでに農民組合設立の要請があった。現在、公共職業組合は四三五人の加盟者を、農民組合は二六二人の加盟者を数える。

我々の同志は原則としてUGTと合意の上で集産主義の計画をたてようとした。しかし、我々の組合の農民は、協定の明記するところに従って、UGTの集産体と合同するという契約で独自の集産体を発足させることで満足しなければならなかった。

ペラレス集産体は二月九日に設立されて、二〇人の同志の委員会で真剣に検討された後、活動を開始した。彼らは集会で採決するためにその決定を案として提出した。集産体が発足して間もなく、村の近くに前線が敷かれた。事業の初期にこうむる様々の労苦にもかかわらず、ペラレスの人々と我々は、司令部の処遇に付すために我々の親愛なる同志を家から送りだすことになった。

地方政庁には、パン八千食分（このための専用のパン焼きがまが四基あった）、肉四千五百キロ、食用油一万リットル、石けん三万キロ、薪五千把、小麦粉五七袋を供出した。一六人の同志を二カ月間戦線で働かせるために送り出した。砲兵隊病院には卵五百ダースと必要な牛乳、砂糖、肉、馬鈴薯をすべて供給した。

彼らは他の者がこの供出をうまく利用するだろうということを知っていたけれども、国際赤色救援隊の病院の需要は彼らだけでまかなっている。回復期にある兵士たちや健康状態から兵役に戻れない者たちを養っている。以上に加えてぶどう酒一万ポンドと牛馬のための乾草、わら、大麦を地方政庁に供出した。このようにCNTの集産体員たちは戦争に勝つために彼らの援助が必要な

時になすべき事を知っているのだ。

ペラレスは小地主の村で、村のある百姓の言うところによれば、純粋の労働者は存在しなかった。ここの最も設備の整った農場でもらば二頭はほとんどいなかった。ごく少数、二頭つなぎで二組か三組がやっとだった。ペラレスの集産体員が耕作している土地は小地主だった者たちが自発的に提供したものである。ペラレス・デ・タフニャ集産体はこの付近で最良のものである。一つの集産体の中に、農業だけでなく、この地方に存在するすべての関連産業が含まれている。牧草地千三百七〇・八八ヘクタール、灌漑地四三七・一二ヘクタール、オリーブ畑四三六・四八ヘクタール、ぶどう畑四三五・七二ヘクタールから生産している。

本年度の収獲は、小麦一九七三・五八キロリットル、大麦四三八四・五キロリットル、そら豆八三・二五キロリットル、からすのえんどう二四九・七五キロリットル、ライ麦八三・二五キロリットル、からす麦三六九・〇七五キロリットル、メロン三千キログラム、トマト八万キロ、ぶどう酒一〇万ポンド（概算）、しょう五万キログラム、玉葱七〇万キログラム、果実一万二千キログラム、馬鈴薯一万二千五百ポンド（不作）に上っている。また野菜四万苗以上が植えられた。以上は厳密に農業だけについて述べたものである。一〇万キログラム以上を産するオリーブ殻の製油所二、一五万キログラム以上を産する石けん工場二を完全な効率で運転していた。食用油三万キログラム以上を製油所で産した。それから素晴しいトマトのかんずめ工場があって、そこではこの冬一・五キログラム入りのかんで五万本以上がつくられるだろう。我々の同志が専用の囲い場で飼っていた鶏やその他の家畜は、二つの農場にいっしょにされた。そこには雌鳥千四百羽、乳牛五四頭、豚八〇頭、羊三百頭、山羊八〇頭がいる。農機具や機械や他の必要品については、必要なだけ持っている。らば一四〇頭、荷車八〇台、犁、その他耕作用具。

集産体の統制と指導は、五人の代表即ち統計および統制、農業および牧畜業、工業、商業、貿易の各代表からなる運営評議会の任務である。集産化したものはすべて詳細な点まで記録されている。例えば、大工の作業場一、鍛冶屋一、焼き判場一、散髪屋一、はては酒場一まで。また、集産体員や避難民が必要品を仕入れる購買部がある。

賃金は、よく組織された集産体では不可欠のものとなっている家族給である。少々不十分だが、何様我々は戦闘中なのだ！ 家族一人当り三ペセタ、妻二ペセタ、子供一人につき一ペセタ追加。独身の男は四ペセタ、女は二・七五ペセタを受け取る。子供のいる寡婦には子供一人当り〇・二五ペセタが追加される。その上、全集産体員は無料住宅と集産体の行なう医療援助を受けている。

セメント工場二と容器工場一が始動を待つばかりになっていて、そのために原料を工作している。しかも彼らにはマドリッドのことを思い出す余裕があるのだ。この冬はうまくないだろう。首都は寒いだろう。だが、ペラレスの住民たちは力の限り首都を援助する用意ができているし、燃料用に供出したオリーブ殻の油三百キログラムをマドリッド住民に送る手筈が整っている。」（『CNT—FAI情報』、バルセロナ、一九三七年一一月六日号）

「ブリウェガ——連合とアナキストの組織はブリウェガでは新設の

ものではない。CNTはUGT以前にこの村に存在した。一九三四年に我々の組織は結成され、一方UGTは一九三六年五月に、つまり運動の二カ月前に生まれたのだ。右翼諸政党は常に相当の影響力をもっており、ブリウェガはその同盟から代表を一人コルテスに送っている。

一九三六年四月、庁舎の前の通りで戦闘が起きた。ファシストの反乱が勃発した時、あらゆる反動的企図から住民を守るために労働者民兵が結成された。この地方の労働者の革命的絶対自由主義的傾向は、ブルジョアジー敗走後に実施された社会生活の根本的な変更のうちに表現を見出した。

村のすべての工業や農業の企業は生産者の手に移った。これらの接収の指導はCNTが行なった。だが、UGTも我々の本部と共にあって、両者は完全に結束して進んだ。

実現された最も重要な事業は農・工業の集産体の創設だった。それは一二五家族、合計約六百人の集産体員を擁していた。集産体は農業生産ならびに農業関係のすべての事業を行なっている。小麦、大麦、からす麦、エジプト豆、そら豆、馬鈴薯、レンズ豆、オリーブ、蜜、くるみ、その他の果実が生産される。羊毛と織物産業がある。集産体はすべての生産物を安く売る購買部を設けた。

村の境界内の大部分の土地、一二一六ヘクタールが、集産体によって耕作されている。小地主は八九六ヘクタールを耕作している。集産体は一九三六年九月からできている。六〇〇ペセタが集産体員に毎週賃金として支払われている。本年五月から一〇月までの金庫の動きは二〇万ペセタだった。村の専売所はこの自由生産者の新しい組織に吸収された。牧畜業は接収されていない。

一九三七年三月九日、イタリア師団がブリウェガを占領した。九日間、住民はファシストの手中にあった。政府軍がそこから敵を追い出した。敵といっしょに小数の小地主と商人が逃げた。後者は最初から集産体の敵だった。

住民の供給は運動が始まった時から自治体の共同組合を通して組織された。反乱者によって引き起こされた破壊にもかかわらず、ブリウェガ解放後、集産体は迅速で模範的な再建を遂げた。

集産体の記録保管所には、自治体全域にわたって接収された農園のリストがある。これらの収用物件は二三三万四二八七・五〇ペセタに相当する。土地の価格九四万七四五〇ペセタ、林一二万八五五〇ペセタ、機械資材一二万三七二五ペセタ、動産三八四六ペセタ、農機具および耕作具一万一一三一ペセタ、役畜四万四四〇〇ペセタ、畜産五万三一四二ペセタ、モンテ・レドンドの商店五〇九二ペセタ、在庫商品一九万一二六七ペセタ。集産体の資産は三八六万四七五二・五〇ペセタということになる。

事業を始めた時には集産体は全く現金がなかった。しかし、モンテ・レドンド、モンテ・ドニャブエナ、モンテ・アバスカル、フィンカ・サンタ・クララ、モンテ・カバノリャ、フィンカ・パラスシオスの農園から前もって接収した小麦の収獲を自由に処分できたし、当然それらの土地は集産体の所有となった。集産体内部では小所有者はわずかで、大きな核を構成しているのは以前の日雇い労働者たちだった。

集産体は製粉工場一、発電所一、織物工場一、チョコレート工場一を所有している。製油所三を所有していたが、これらは反乱

軍の飛行機に破壊された。

反ファシスト運動の諸勢力は一九三六年一一月までは次のように分かれていた。共産党に八〇人、CNTに一四〇人、UGTに八〇人、FAIに一七人、JJLL〔リバータリア青年団〕に四三人。社会党も左派共和党もなかった。集産体員の賃金は既婚者五ペセタと子供一人当り〇・七五ペセタである。働かない日も支払われる。子供たちのほとんどが村や村の近郊で起きた大きな戦闘の後の難民で、前線の付近にいる。CNTとUGTの間は完全な友好関係にある。共産党員は小地主の保護に腐心している。乾燥地一二九五ヘクタール、オリーブ畑四〇ヘクタール、山岳地千ヘクタール、丘陵地二六〇ヘクタール、灌漑地四三ヘクタール、畑二三ヘクタールが自治体の領土を形成している。

自治体評議会はCNT五、UGT五の一〇人の委員で構成されている。議長はCNTの者である。住民の供給は供給評議会によって組織され、分配は配給票によって行なわれている。小麦生産はマドリッドのCNT—UGTパン製造協会に売られた。協会はこれまでに一〇五キログラムの小麦を買い上げた。二〇万キロの予約が決まっている。

ブリウェガはCNTの同名の地区連盟の本拠である。全地区でファシストから解放された土地の面積は三万七千ヘクタールである。これらの土地のうち、集産化されているのは、アルカリア、アタンソン、バリオ・ペドロ、ブリウェガ、バルコネテ、カスプェニャス、フェンテ、デ・アリカリア、イタ、ロマンコス、トメリョス・デ・タフニャ、トレ・デル・ブルゴ、トリハ、ヴァルエルモソ・デ・タフニャ、ヴァルデグルドスである。これらの土地のうち収用されているのは、乾燥地一九七七七ヘクタール、オリーブ畑二三七二ヘクタール、ぶどう畑一三九ヘクタール、山地八四七六ヘクタール、灌漑地一〇〇六ヘクタール、畑一七七ヘクタール、牧草地五二四八ヘクタール、河岸林二〇九ヘクタール、果樹林八一ヘクタールである。収用された土地は合計三万七三八五ヘクタールの地区を形成している。

戦争に関しては、一九三七年三月、イタリア軍の攻撃を阻止する作戦のために、CNTの組合員とその最も活動的な闘士たちとが戦闘に強力に参加した。

アルカリアの大戦闘が行なわれた村の農民の生活は、かくの如きものである。封建主義によって奴隷にされていた土地に、新生活の息吹きとともに喜びと幸福がよみがえっている。」(『CNT—FAI情報』、バルセロナ、一九三七年一二月一一日号)

「トリハ(グァダラハラ)——村には一八〇人の住民がいるだけである。彼らの郷土は二七一三ヘクタールの土地で成り、そのうちほとんど二千ヘクタールが乾燥地であり、大部分が大地主の手にあった。政治的にはこの村はロマノネス伯爵の出先機関だった。

治安警備隊の屯所の六人は、反乱運動が始まった時、労働者に対して決起しなかった。そのため、戦闘の必要はなかった。しかしまた、革命の初期数カ月間は村でいかなる変更の作業もなされなかった。改革は戦争とともにやってきた。トゥリフェケとブリウェガの戦闘後、数人の地主がファシスト側に着いたので、彼らの財産はイタリア師団退却後に接収された。土地の接収はUGTとCNTによって共同で行なわれた。ファシストたちの財産はこ

うして労働者の手に移った。小地主の大部分は共和国に反対ではない。彼らは忠誠を表明して、彼らの土地を以前と同様に耕作している。収用した財産によってCNT—UGT農民集産体は活力を得た。ここには八〇家族が加入しているのである。

集産体の組織は常に形成途上にあるが、結果においては成果をあげてる。以前、農民は一年のうち数カ月しか働けず、残りの間は生活の手段もなく置かれていた。今日では彼らは一年中働いて、日給五ペセタと指定された賃金を一年中得ている。家族給は存在しない。播種期間中は農民たちは八ペセタを得、収穫期には一〇ペセタを得ている。

この集産体は他の地方に比べて若いので(本年三月に生まれたばかりである)、完全に正常な集産体ほど生産は多くなかった。小麦一八三一・五キロリットル、大麦七二一・五キロリットル、からす麦三三三キロリットル、さらに馬鈴薯千キログラムが収穫された。耕地面積は私有制の下で耕作されていた土地よりも広かった。

その他の農園から羊五百頭、乳牛三頭、らば一四頭が収用された。小所有者一人が自発的に二五六〇アールを提供して集産体に加わった。

労働は、農場労働者グループの一人、鍛冶屋一人、管理者一人の三人の代表からなる委員会によって組織されている。活動を始めるために集産体はCNTから七千ペセタと農地改革協会から二万五千ペセタの貸与を受けた。一〇月下旬、即ち設立後七カ月目に、集産体は三万三五九〇ペセタ相当の小麦九万九二四二キログラムによって農地改革協会に借入れ金を返済した。この量の他に播種用と集産体員の供給用のために七七七キロリットルの小麦を残しておいた。

集産体は豊かに発展している。その成員は新生活の健康な明るい気持を抱いており、彼らの共同事業をさらに改善する大計画をもっている。」(『CNT—FAI情報』、バルセロナ、一九三七年一二月一六日号)

工業における革命

カタルニャで最も独特な工業の一つは、バルセロナ、バダロナ、サバデル、タラサに集中している繊維工業である。バルセロナだけでも、CNTはこの産業の労働者四万人以上を把握していた。地方全体の二万三千の労働者についてはCNTはその七〇パーセント以上を把握していた。

繊維産業における最初の革命的表現は統制委員会であった。バルセロナ製造・繊維工業統一労働組合が公開した記録(一九三六年九月)はその活動を次のように定義している。

「最近の統制委員会の使命——一、交換において実現可能な平等を確立するために、我々の労働の正当な価値と、生産者と消費者の間に存在する関係とが何であるかを知ること。二、租税として国家が工業や商業に課する額を、原材料や技術・管理コストを当然加えて、生産コストの額に対する賦課を決定するために、知ること。将来の生産を確信をもって決定するために、困難な問題を調べ、あらゆる手段を探り、あらゆるエネルギーを研究し、あらゆるごまかしを知り、実際の生産に使用される原料の質や量の正確な価値を理解すること。これが統制委員会の使命である。か

かる目的を達成するために、バルセロナに、製造・繊維工業および繊維関連産業の統制・経済中央委員会が設置された。

一、この委員会は、製造・繊維組合によって決定された一般方針に沿って、全体的にかつできるだけ良い条件において、諸工業の統制を組織化するための全権を有し、すべての工場や作業場のそれぞれの統制組織と連絡をとる使命を有する。この委員会は常に組合が任命し、その統制と信任の下に活動し、任務を果たすために必要と考えられる数の委員によって構成される。

二、中央評議会と同数の労働者と技術者からなる統制委員会が、各工場あるいは作業場に設置され、また労働者は必要なものを設立する。この委員会は中央統制委員会に参加して、ここから要求されるあらゆる資料を提出する。

三、各工場の統制委員会は、工場の経済状態を常に正確に知り、販売地における正確な生産物価格を確実に決定するために、生産に関するあらゆることを統制する。

四、需要や注文の出所や種類、原料の価格などを統制する。また、市場に着く前の関連の取引き価格や売価や純益をも統制する。

五、統制委員会は次のことを知っていなければならない。a 機械類の在庫、種類、ペセタ換算額。b 一週間ごとの原料の量。c 特産品とその一週間の製造量。d 工業に必要な種々の原材料の産出地とその工場持込み価格。

六、製品の配送・販売地とその売価。

七、週および月の賃金総額。

八、特殊技能によって月給制で工場や事務所に雇われている職員。

九、工場や事務所の全種類の租税の出費。

一〇、原料と製品の在庫。

一一、工場の全体的経済状態、資産と負債。

一二、収入と同様、工場や事務所の総支出の週および月の数字。また、原料や製品の動き。

一三、事故や病気による労働低下の週の実態。

一四、この設問で予見されてないすべての場合の週や月の実態。

統制委員会という第一段階が達成され克服された後、同委員会は技術的管理的機能を果たすようになる。みずからの責任の下に、労働の組織と指導に従事し、集産体に最も適した製造方法を決定する。この時には、製造・繊維経済中央委員会が繊維産業の最高機関の機能を果たし、原料購入や全製品の販売や交換を調整する。その機能のためにこの委員会は地方食糧委員会と協議することができる。

工場委員会――この委員会は工場における秩序を維持し、全労働者が義務を果たすよう努力する。また、労働が最良の衛生・安全状態で行なわれるよう監視する。工場委員会は労働者の苦情をすべて聴いて、できるだけすべてのことで労働者の希望に沿えるよう、中央委員会と合意に達する努力をする。もし合意に達することができなければ、満足すべき決定に達するために当該部門評議会に報告する。

工場委員会はまた、労働においては労働者自身が互いに尊敬しあい、中央委員会を尊敬するよう努力する。彼らもみな労働者で

あり、彼ら自身のために働いているのだからである。工場委員会は全労働者が組合に加入し、正確な会計票を携帯するよう監視する。また、病気や事故の時に労働者と必ず共同体が世話するよう監視する。工場委員会の代表一人は中央委員会の総会に出席し、工場委員全員が会合する時には中央委員会の代表一人が出席して、常に両委員会が合意するよう目ざす。工場委員は六カ月ごとに改選される。

会計代表――この代表は労働者の分担金一切を決める使命を有し、正確で迅速な算出をすることができるのに適当と思われる人数からなる。この仕事は毎月監査を受ける。代表の使命は全加盟者を尊重して、彼らすべてに組合費納入を便利にするよう努めることである。男女すべての労働者は毎週組合費を納める義務を有し、分担額を会計代表に提出しなければならない。これらの仕事は義務である。」

北部の政府地区における経済関係については我々はほとんど知らない、この章で記述する明確でない記録（アストゥリアスにおける工業統制に関する宣言と、ヒホンとラレドの漁業の集産化に関する二つの記述）以外には、同地区における他の事実についてはほとんど知られていない。そこで起きた戦闘の事情が、疑いもなく人民の創意の完全な拡大を許さなかったのである。

北部では戦闘は偉業とはうらはらの苛酷さでもってすべてを飲みこんだ。軍隊による占領、孤立、包囲は革命史にとって貴重な証拠を消し去ったのだった。

次に述べる三つの記録を通じて、一方ではその苛酷な事実の重みと、地方ではあらゆる困難にもかかわらず遂行された創造的な実践という既成事実とが、推察される。

「アストゥリアス、レオン、パレンシアにおける工業統制に関する宣言――アストゥリアス、レオン、パレンシアのＵＧＴ地方書記局ならびにＣＮＴ地方委員会は本日会合して、次の決議を実施することに合意した。

一、どちらかの組合本部に属する組合は工業統制委員会に参加する。それらの組合は、統制委員会が設立された正確な時点で、少なくとも組織労働者の一〇パーセントを有しているのである。代表権は両者同数とする。議長は多数派組合のものとなり、彼の投票は無効となる。

二、前項で定められたことは遵守されねばならないとしても、選挙は民主的になされるだろう。労働者に好ましくない人物を強制することを避けるためにそうするのである。彼らは一組合あるいは数組合から、最も信頼をもてる一人物あるいは数人を選出する。一九三六年七月一九日以前に組織された組合の加盟者はこれらの地位に完全に着くことができる。ＵＧＴとＣＮＴは工業の諸問題を検討するために合同集会を開くことを協定する。

三、統制委員会は次の規定に従って構成される。a 産業別に工場や作業所で。b 事業別に鉱山や建設業で。c 地区別に鉄道で。d 港湾労働および海上船舶別に。e 商業の中心地別に商業、印刷、小工業で。f 生産および販売共同組合（合同共同組合）別に、田舎で。g ＣＮＴとＵＧＴの共同組合の決定する規定によって、予測されない場合には、ある工業に固有の特殊性によって。

四、統制委員会とはCNT—UGT統制委員会である。これら統制委員会の使命をその加盟者の間に行きわたらせることを約束する。指導の使命でもなく、指導や管理の技術部隊の活動の吸収でもないのである。その主要な役割は指導部との協力である。生産の確実な遂行に気を配り、あらゆる種類の創意や示唆を与えて指導部を助けること。その組織の中では指導部に異常や欠陥を報告して、それらを正し、労働条件や効率を高めるようにする。今述べたと同じ任務は、指導部や管理部や技術部隊も、統制委員会と協力するために負わなければならない。

五、統制委員の地位は全く無報酬で名誉職のようなものである。それに選ばれた同志たちは委員会での自分の仕事を労働外活動、作業所や坑内その他の同志全体の信頼を受けている仕事だと心得なければならない。そして委員会での仕事は労働時間外に行なわなければならない。ということは、その同志が委員会に入る前に行なってきた日常の労働は普通に続けなければならないということだ。これはCNTとUGTに、生まれようとする官僚主義に対する真剣な闘いを義務づける。官僚主義はその芽を摘みとる時を逸すれば、最も健全で良心的な労働者階級をさえ、労働者階級自体にとって正しく危険としか言いようのない道に進ませるものである。収容数が大で委員の仕事が非常に困難にならざるをえない工業は、以上の場合から除外される。

六、CNTとUGTは、去る七月一六日まで〝犬〟あるいは御用組合的性格をもっていた組合に対しては、いかなる個人的承認も与えないことを約束する。十分検討した後だけに、それらの組合にいた者の個人的な加入が、それを希望する労働者に個人的に許される。こうして得られた分子は指導であれ管理であれ責任のある地位にはいかなる意味においても着くことはできない。両組合本部から、十分注意を要する忌避すべき人物のリストが相互に提供される。CNTとUGTは、何らかの理由によって欺されて階級的組合から離れて反対し、ブルジョアに奉仕する組合に加わってきた分子に、革命の戦場で合流し復帰する権利を保証する。しかし、彼は常に厳格な統制の下におかれ、組合の厳しい監視を受ける。

七、CNTとUGTは、いずれの組合本部にとっても好もしくない人物として、その加盟申請を拒否された分子、あるいは除名された分子——労働者階級と民主主義に対する敵意が常にその条件である——を内部に入れないことを約束する。

八、CNTとUGTは労働者の自発的な組合組織を保護する。組合の抑圧的手段を排し、労働者がその個人的な考えによって一層一致できる組合に加盟するための権利と自由を保証する。その場合、変更は彼が脱退する組織の決定を履行しなかったという理由であってはならない。

九、CNTとUGTは二つの直接的目的をもってその仕事を進めることを約束する。即ち、戦争に勝ち、進行中の革命を組織化すること。

一〇、二つの組合本部の相対する組合の間で生じうる相違はすべて、UGTの地方組織とCNTの地方組織の責任ある同志の合同委員会によって解決される。これらの決定が地方全体に徹底しているかどうかを、全体と各場合とについて調査するために、合同視察を行なうことを内容とする。

補足、これらの決定は八日間の期限をもって両組織の機関紙に発表される。両組合本部以外の組合に指令を出すことは支障ない。

ヒホン、一九三七年一月——CNT地方代表、書記局シルヴェリオ・トゥニョン——UGT地方代表、書記局ヴァルデス」

ヒホンの漁業——運動の初期の間に、完全に自立的に機能する地域統制組織が結成され、漁獲はいかなる交換物も要求せずに食糧委員会に供出された。これらの統制は漁業組合の指導の下に活動する統制委員会を基礎に行なわれた。その決定と任務は総会によっていた。

漁船が桟橋に着くとすぐに魚の分配が行なわれた。まず病院と療養所に補給され、残りが一般住民と民兵にあてられた。

運動の最初の数カ月間は、漁民にも他の種々の部門の労働者と同様に賃金がなかった。労働者は各自家族数や職場や住所等を記入した消費カードを持っていた。漁民はこのカードと引き換えに彼らの商品を渡した。このカードによって彼らに一定の配給を得る権利ができた。

地方共同組合が最初につくられた食料委員会に交替した。交換は次第に活発になった。地方的な組織である共同組合評議会が結成されて、商業評議会を通して全共同組合への供給を行なった。にもかかわらず、住民はこの改革に対して頑固だった。

一九三六年一一月、アマドル・フェルナンデスは『アヴァンセ』〔前進〕に一連の論文を発表して、小商業とブルジョアの自由を弁護し、連合分子と社会主義者の間に白熱の論争を呼び起こした。

軍隊による封鎖は、常に船団を海の危険にさらしての漁業組合の貢献によって部分的に緩和された。ファシスト側は陸上を苦労して進まねばならなかった。彼らの意図は住民を飢えによってうち破ることだった。多くの漁船が沈められ、捕獲され、あるいはエル・フェロルに送られて、そこで乗組員は射殺された。

漁業はアストゥリアスでは地方の富の第二位を占めていた。大きな船も小さな船も最初から社会化された。市場、製鉄工場、かん詰工場（この後の二つはスペインでは非常に重要だった）、商店あるいは取引所についても同様だった。すべては組合の手に移り、さらに後には漁業評議会の統制下に移った。この統制委員会は加工あるいはかん詰工場のあるアストゥリアス全土の臨海地帯の港町に代表部を置いていた。（一九三八年七月号のパルセロの『チモン』〔舵〕に発表されたソラノ・パラシオの論文の要約）

「ラレドの漁業——内戦の直前まで〝卸売り〟と〝小売り〟のために絶え間ない事件を繰り返していた漁業は、漁業労働者によって社会化され、CNTのメンバー六人とUGTのメンバー六人からなる経済委員会が設立された。委員会が全ての漁船を接収した時、船主はいなくなり、従って漁民の間の階級がなくなった。

レオンの一部でかつて船主や仲買人によって行なわれていたようなことはもう起きなかった。今では、全体の漁獲のうち、費用を差引いた後、四五パーセントは漁業の改善のためにあてられ、残りは等分されて全漁業労働者の間で分配される。以前ビルバオやサンタンデルなどで売るために魚を買っていた仲買人はもういない。同じく経済委員会がその輸送と販売に従事しているからである。つまり、できるかぎり仲介業者は消されつつあるのだ。

労働者たちが漁業を掌握してからわずかの時間しかたっていな

いのに、また、最悪の漁期であったのに、先週は、費用を差引き、漁業の改善のために十分な割当てをとった後、各自に必要な魚の他に六四ペセタずつが分配された。これによって、雇用主を除いては労働者たちは自分の問題を解決することができないと信じていた者たちに対して、その誤りを明確にすることができた。

CNTとUGTは、近い将来実現されるであろうが、住宅と土地と電力の自治体有化を計画している。つまり、共産主義者であろうとアナキストであろうと、全社会主義者が望んでいる目標へ、ラレド住民を導く社会改革を始めようとしているのである。結局、ラレドでは新しい世界での生活が始まっており、疑いもなく、地方の民兵に刺激を与えるものとなっている。なぜなら、彼らが前線での疲労を回復しに来た時に、後方では革命的事業が実現されていることを発見するからである。

労働者の文化水準が大都市に住んでいる労働者のそれよりも極めて低いこれらの村において、事態を明確に認識してこれらの決定が採用されていくことは頼もしいことである。それは我々の高貴な理想の反映である。反対に、大都市の労働者の怠惰は何となげかわしいことか。

UGTとCNTは、労働者の生活改善に関するすべての点で一致し、都市と農村に自由と正義と平等の光をあてる社会事業をラレドで行なう。ヴィスカヤのUGT労働者と指導者は彼らに先行している事実をどう考えているのか？　いつ惰眠から目覚めるのか？」（『セルヴィシオ・デ・プレンサ・デ・ラス・フヴェントゥデス・リベルタリアス・デ・ビルバオ』〔ビルバオ・リバータリア青年団通信〕一九三七年一月号より）

直接購読のすすめ

『黒の手帖』は定期刊行の雑誌ではない。文字通りの不定期刊行物である。別記の書店を除いては、市販していない。だから、『黒の手帖』を確実に入手するには、二号分あるいは四号分前金払い込みで直接読者になるのが一番である。

『黒の手帖』は広告を一切取らない方針である。理由は、広告を取る煩わしさにかかわりたくないためと、小さな誌面を大事にしたいためである。だから読者の購読料が『黒の手帖』の主要な収入源になる。読者が口伝てで『黒の手帖』の存在を知らせて、直接購読者となることをあえてお願いしたい。

購読料の払い込みは（振替東京一〇二四六五番）か現金封筒の利用が、一番安全である。切手で代用されてもよい。

◆『黒の手帖』取扱書店◆

東京＝文献堂、ウニタ書舗、吉祥寺ウニタ、文泉堂、模索舎、かんたんむ、ミニ・ブックショップ。川崎＝甘露書房。名古屋＝ちぐさ正文館。京都＝三月書房、京都書院、ふたば書房。神戸＝イカロス書房。札幌＝アテネ書房。

編集後記

長谷川進の力篇「ランダウアー生涯と活動　上」を載せることができた。

ランダウアーについてはささやかな思い出がある。ぼくがまだ学生だった頃、ある研究会で、「ランダウェルはプルードン風のアナキズムを奉じていたが、その彼がドイツ革命で闘って死んだ、その矛盾が興味深い」というようなことをしゃべった。青くさい学生のキザな言い分と響いたのだろう、ごりごりのある老アナキストに「ランダウェルだか、ランドセルだか知らないが、アナキストが主義に殉ずるのはあたりまえだ……」とどやしつけられた。

この一途な老アナキストはのちに自殺してしまったが、当時、ランダウアーはランドセルにもおられるくらい未知の存在だったのだ。

ぼくがランダウアーのことをだれに聞いたのか、たぶんトラーの書簡集に出てきたのだったとおもう。三木清が「新しい個人主義」として注目しているというような「訳者あとがき」ののっていたその本は、当時ぼくの愛読書の一つだったのだが、友人に貸したまま行方不明になってしまった。

◇

最近ドイツ革命に関する関心はたかまっているが、しかし、トラーやランダウアー、ミューザム等々に対してこの国の文学者研究者は殆ど取り組もうとしない。相も変わらず、ローザ・ルクセンブルクであり、カール・リープクネヒトであり、ブレヒトであり、ルカーチである。トラーやランダウアーやミューザムは、なるほど彼らに比べてマイナーであるかもしれない。しかしマイナーであるゆえに、それだけ価値が低いということにはなるまい。そういう価値判断は事大主義以外のなにものでもあるまい。

なんだ、かんだいっても、まだまだこの国の知的風土は事大主義の気圧配置が、保守革新を通じてきわめて濃厚である。

◇

第二号以来、えんえんと連載を続けてきたペイラツ『スペイン革命におけるCNT』も、次号で第一巻が完結の予定となったこの連載が終わるまではなんとしても『黒の手帖』を発行していく決心をしていたのだが、さて次号で完結となると、ちょっと心の心棒が外れたような気がしないでもない。

しかし、連載は秋山清のアナ・ボル論争が続いており、ぼくの「人間における遊戯と労働」も当分終わりそうにない。菅田正昭「船の思想」は始まったばかりだ。どうやらこのまま幕を引くわけにもいかなそうだ。

黒の手帖　第十六号
一九七三年十一月三十日発行

編集発行人・大沢正道

発行所・黒の手帖社　東京都新宿区北山伏町三三（大沢方）郵便番号一六二
振替・東京一〇二四六五

印刷所・株式会社清水印刷所　東京都新宿区戸塚町三丁目一五〇

定価・二五〇円
送料五五円
二号分前納・六〇〇円
四号分前納・一二〇〇円
（いずれも送料共）